

2,408 I.U.であつたものが8月には僅か957 I.U.を数えるのみである。なおAの73.1%は緑黄色野菜から摂られており、動物性食品からの供給は僅か10.9%（市部12.9%、郡部8.5%）に過ぎない。業態別に考察すると、特殊農業世帯、田作世帯が高く、低位を示したのは漁業者及び類似従事者世帯である。

また年次別にみた場合も比較的摂取差が多く、概して昭和21~23年頃は摂取量が多かつたが、その後相当の減少をみた。なお昭和30年から摂取量が急減したのは成分表の改訂が行われ、ビタミンAの分析値のうち植物性の食品の力価を $\frac{1}{2}$ として計算したためである。

B₁ 昭和31年度摂取量は全国1.13mg、市部1.18mg、郡部はやや少なく1.07mgとなつており、これらはいずれも前年よりやや下回る数字である。従つて基準量の1.20mgに比して調理上の損失を考慮しない場合においても不足状態にあり、これを考慮すれば相当量の不足が考えられる。

なおB₁の56.6%は穀類から供給されており、次いで野菜及び果実14.2%、動物性食品12.3%が主な給源である。

業態別の5月調査においては事務的従事者世帯の1.49mgが多かつたが、他の業態ではほとんど差がなく1.10~1.20mg前後である。季節的には5月がやや多くなつてゐるほかは著しい差を認めず、年次別には他の栄養素は逐年増加をみせているに反し、むしろ減少傾向がみられ、はなはだ遺憾なことといわねばならない。すなわち市部では21年から26年まで1.60mg程度であつたものが27年から減少し、郡部では21、22年が約2.00mg近い値を示したが、23年から26年までは1.60mg前後、27年から1.10mg前後と著しく減少している。

B₂ 全国平均摂取量は0.70mgで前年より若干の増加を示しているが、基準量と比較すれば素材料計算においても僅か58.3%に過ぎない。

業態別には畑作世帯が他業態より僅か低いが、季節的及び年次別の摂取差は特に認められない。なおB₂は全国平均では穀類からの供給が最も多く30.0%、次いで動物性食品から27.1%、野菜及び果実類24.3%となつてゐるが、市部では動物性食品が30.6%（穀類は29.1%）で首位を占め、郡部では穀類、野菜及び果実類、動物性食品の順となつてゐる。

C ビタミンCの摂取量は一応素材料計算においては、全国年平均77mgとなつてゐるが、調理上の損失を考慮すればまだかなりの不足が考えられる。

摂取量を季節別にみるといずれも11月が多く8月に少なく、特に郡部における11月の摂取量は104mgであるのに対し8月は僅か58mgに過ぎない。

業態別にみて高い値を示したのは特殊農業世帯で、逆に低い値を示したのは漁業者及び類似従事者世帯並びに林業従事者世帯である。年次別にみると21年から25年までは市部、郡部を通じて100mgを越えていたが27年から急減し75mg前後となり、それ以来特に変化は認められない。なおビタミンCはその約80%が野菜及び果実類から供給され、いも類も16.9%（市部13.3%、郡部20.2%）と良い給源をなしている。

2. 食品群別摂取量

穀類中麦類殊に大麦が激減し、これに反し米は増加しているが、穀類全量としては減少の傾向にある。また油脂類、豆類の増加がみられ動物性食品では魚介類が僅か減少したが肉類、卵類、乳類は増加し殊に乳類

の増加は著しいものがある。果実類は増加したが野菜類は相当量の減少をみた。総じて動物性食品が増加し、植物性食品の摂取量が減っているが詳述すれば次のとおりである。

(1) 穀 類

米

米の消費量は全国平均で前年より約 4.6 % 増加を示している、なお郡部は約 40 g 程度市部より摂取量が多く、この差は例年殆んど変化していない。市部においては白米に対しその 14.5 % は七分搗米であるが郡部では 6.2 % に過ぎない。季節別にみると 2 月 が摂取量多く 8 月に少なく、その差は全国で 50.5 g である。業態別では田作世帯の摂取量が最も多く 457.5 g で、次いで田畑作世帯、林業従事者世帯が多く低い値を示したのは特殊農業及び畑作世帯である。

強化米の使用量は事務的従事者世帯において 0.3 g 認められるほか、殆んど皆無である。次に年次別に米の消費状況をみると、21 年が最も少なく、特に市部にあつては 31 年度摂取量の半量程度であつたが 25 年より漸次増加をみ、29、30 年には若干減少したが 31 年に至り戦後の最高を示すに至つた。

大 麦

前年に比較して大麦の使用率は市部、郡部を通じて減少し、全国平均で約 30 % の減量をみた。郡部は市部に比べ、また業態別では米の消費量の少なかつた特殊農業世帯の摂取量が多い。

小 麦

前年より市部、郡部とも若干減少し、全国平均で 3.5 % の減量をみた。市部における食パンの消費は小麦類（全量 80.0 g）の 30.6 % を占めるが、郡部では（全量 51.3 g）11.5 % である。乾麺の占める割合は市部 13.3 %、郡部 36.1 %、生麺は市部 29.4 %、郡部 12.3 %、小麦粉は市部が 7.1 %、郡部 26.1 % であり、即ち市部では食パン、生麺、郡部では乾麺と小麦粉の形で摂取していることがわかる。

業態別には畑作世帯、事務的世帯が多く、漁業者及び類似従事者世帯が少ない。その内訳をみると小麦粉は畑作、特殊農業、田畑作世帯が多く、食パンの消費は事務的世帯が群を抜いて高く、生麺は事務的、労働的従事者世帯が多く、乾麺は畑作並びに田畑作世帯に多い。

雑穀は畑作世帯が 26.4 g を示すが、他業態では殆んどみるべきものはない。

(2) い も 類

甘藷は逐年減少傾向にあつたが、特に 31 年には市部、郡部とも激減した。なお郡部の摂取量は、数年来市部の約 2 倍に及んでいる。業態別にみると甘藷の消費は特殊農業世帯が最も多く 110.0 g、次いで畑作世帯 69.8 g、最低は事務的従事者世帯の 8.0 g で他の業態は殆んどが 15～30 g の範囲である。

馬鈴薯は当初からみればかなりの減量をみせたが、近年固定の傾向がみられる。なお市部では甘藷の消費が減つて馬鈴薯がやや増加したが、郡部では減少している。また甘藷と同様特殊農業世帯が多く 76.7 g で、甘藷の少なかつた事務的従事者世帯でも 44.6 g とかなり消費されている。

その他のいも類は畑作世帯、林業従事者世帯が多く、いも類全体としては特殊農業世帯の 186.7 g が多く、これからの熱量は総熱量の 12.1 % にあたり、次いで畑作、田畑作世帯で少ないのは事務的従事者世帯であつた。

(3) 砂 糖 類

二、三年来消費量はほぼ一定し、あまり増減は見られないが、市部の消費量は郡部を 22.9 % 上回つて

いる。なお業態別には事務的従事者世帯が多いが他の業態では大差を認めない。

(4) 油脂類

油脂類は調査当初の21年頃は1.5g前後であつたものが市部、郡部を通じて逐年増加し31年には前年に比較して15.9%の増加をみた。なお郡部の摂取量は市部の $\frac{2}{3}$ 程度であるが、この割合は例年ほぼ一定している。業態別にみると事務的従事者世帯の6.8gが最高で、うちバターが1.2gを占めている。少なかったものは林業従事者世帯で、僅か1.5gであるが、他の業態では特に差異を認めない。バター、マーガリン等は事務的従事者世帯とその他の世帯を除くほかはほとんど消費されていない。

(5) 豆 類

市部、郡部を通じて味噌、大豆製品、その他の豆類ともに増加し全量で全国年平均8%の増加となつてゐる。なお市部では大豆製品、郡部では味噌が多いが、これらの総量においては市部が11%郡部を上回つてゐる。業態別にみると大豆は田畑作及び林業従事者世帯に多く、味噌の消費量は田畑作世帯が40.8gで最高、次いで田作世帯、畑作世帯となつてゐるが、他の業態ではいずれも25g前後である。

大豆製品は、事務的及び労働的従事者世帯が多く、漁業者及び類似従事者世帯、特殊農業世帯などが少ない。総じて豆類の使用は事務的、林業、畑作の各世帯が多く、特殊農業、漁業者及び類似従事者世帯が低く、他の業態ではほとんどみるべき差がない。年次別にみると大豆及び味噌はほとんど増減はないが大豆製品の利用は年を追つて増加している。

(6) 動物性食品

前年に比べて魚介類は若干減少したが、動物性食品としては6.9%の増加をみせてゐる。すなわち市部にあつては魚介類が9.1%減少したが、獣鳥肉及び乳類の増加がみられ全量で3.2%増、郡部では特に乳類の増加が著しく、全量において9.5%増となつてゐる。但し、いずれの食品にあつても市部が優位にあり総量において39.3%まさつてゐる。

季節的には11月に多く8月に少なく、年次別には市部、郡部を通じ逐年増加し漸次食糧構成改善のきざしがみられる。業態別にみると魚介類は漁業者及び類似従事者世帯が最高で113.1g、林業、畑作世帯は45gを僅か上回る程度で最低となつてゐる。他の業態はいずれも75g前後である。獣鳥肉類は事務的従事者世帯が他業態をはるかに越えて21.3gを示しているが、漁業者及び類似従事者世帯、特殊農業世帯は2gに達していない。このほか生産者世帯は一般に低位にある。

卵類は事務的従事者世帯に多く、乳類の摂取量の最高は特殊農業世帯の40.8g、次いで畑作及び事務的世帯となつてゐる。総じて動物性食品の摂取量の多かつた業態は事務的、漁業、その他の世帯で林業従事者世帯は最も低く総量において事務的世帯の45.9%に過ぎない。

(7) 野菜及び果実類

全国平均において緑黄色野菜は19.1%、その他の野菜は6.1%減少したが、果実はむしろ増加し柑橘類23.4%、その他の果実63.0%の増加となり、これらの全量としては僅かながら増加している。市部と郡部の関係をみると、市部は果実類が、郡部は野菜類が多く、総量においては郡部が多少上回つてゐる。季節的には緑黄色野菜は市部では2月に多く5月に少く、郡部では5月に多く2月に少ない。その他の野菜は8月に多く2月に少なく、果実類では8月に多く5月に少ない。業態別にみると緑黄色野菜は田畑作世帯が多く、低かつたのは漁業者及び類似従事者世帯である。その他の野菜は業態別の摂取差は比較的少な

く、果実類は事務的従事者世帯が最高、田畑作、畑作世帯が少ない。年次別の増減をみると市部では21年が最も高く、28年まで漸減し29年から再び僅かながら増加傾向がみられるが、郡部では28、29の両年がやや低かつたはかは著しい差はみられない。

(8) 漬 物

市部では前年に比べて16.1%の増加をみせたが、郡部では僅かながら減少し、全国平均においては6.6%の増加となつている。なお従来はその摂取量において常に郡部が上回っていたが、31年度は逆転し市部が僅かながら上回る結果になつた。

業態別で多かつたのは林業、漁業世帯で逆に低かつたのは特殊農業及び畑作世帯である。

(9) 海 草 類

前年より若干の増加をみせているが地域別、季節別摂取差は殆んどない。業態別には畑作世帯の10.2gが多く、特殊農業世帯の2.4gが少ないはかは大差がみられない。

(10) 調味嗜好品

醤油は市部、郡部とも逐年僅かの減量をみせているが、その他の調味嗜好品にあつてはかなりの増量となつている。なお醤油は例年のとおり郡部が多く、嗜好品類は市部特に事務的従事者世帯に多くなつている。

3. 栄養欠陥（身体症候）

前年度に比べて貧血（2.6%）、毛孔性角化症（3.1%）はやや増加し、口角炎（5.4%）は変化はないがビタミンB₁欠乏症候とみられるけん反射消失（9.1%）、浮しゆ（2.8%）及びはい腸筋圧痛（5.3%）がかなり増加しており前述の栄養摂取状態を裏書きしている。なおこれらの栄養欠陥を一つ以上有する者の数は全国で被調査者数の22.6%、市部19.0%、郡部26.2%で依然として栄養欠陥は郡部に多発している。

郡部が市部に比べて著しく多い症候は口角炎、けん反射消失及びはい腸筋圧痛で、これらは糖質過多と良質蛋白質及びビタミンB₁、B₂の不足によるものと思われる。年令別、性別にみると貧血は女子に多く年令の増すごとに増加しており、口角炎は5～14才の年齢、殊に当該年令の男子に多く、郡部では今なお児童の10%以上が罹患しているとみられる。（最高を示したのは郡部の5～9才の男子の11月で17.0%を示した）。毛孔性角化症は10～39才の女子に多く5%以上が罹患しているとみられ、けん反射消失、はい腸筋圧痛、浮しゆは年令の増すごとに増加し女子に多い。

年次別にみると戦後の極端な食糧の不足時代には貧血、角膜乾燥、浮しゆ、除脈等が多かつたが3～4年を経過するにつれて漸減した。その他の疾患については一定の出現率を示しそれ以降はあまり減少を示さないのみか反つてB₁欠乏症候については増加をみせている。

血 圧

最高血圧 最高血圧平均値は、僅かながら男女の差が認められ、20～24才までは男子の方がやや高いが、45才以上になると女子の方が高い傾向を示している。その間は殆んど差はない。血圧分布は女子の方が極めて広くばらばらである。市部、郡部別平均値の差は明らかでない。業態別の差は、例数の少い業態もあつて一様に判定することは不可能であるが、比較的例数の多いものを比較してみると、筋肉労働をしている田畑作者、畑作者の方が事務的従事者よりも一般的に高い傾向を示している。